

缺

一幕

田中澄江

人物

松子

菊子

A子

B子

C子

佐川

課長

社員甲

乙

丙

大達

大きなビル内の社員食堂兼集会室。土曜日の午後四時ごろ。早春の柔い陽の光りが空をおおっているのだが、ここまではとどいていない。事務の若い女たちが、正面におかれた長細い食卓を利用して、活け花の稽古をしている。もうほとんど皆でき上がりかけて、卓上と言わず、床と言わず、花花の截り屑が散乱しているのだが、妙にしんとうす寒い気の漂っているのは、ほかに何の飾りもない、がらんとした部屋の白っぽさのせいかもしれない。右手は隣室との境を斜めに、舞台いっばいを切っている衝立。「大達三郎氏歓送会場」と紙が

はられている。ビール箱をかついだ社員の一人が左手から来て、衝立のかげに消える。盛んな拍手がおこる。

若い女たち（松子、菊子、A子、B子、C子）の関心は、ほとんどすべて衝立の向うに吸いよせられる。はじめはじに立った松子と菊子は、それぞれ群れから孤立した感情を、菊子はときれがちに鼻唄をうたうことにより、松子は菊子のほうを注視することによって示している。中年の活け花師匠佐川は観客席に背をむけている。拍手の音。

課長の声 （せきばらい一つ） ええ……ご指名によりまして僭越ながら、御挨拶を申し上げます。この度、わが社総務部のホープであられた大達君が、大阪支店の課長補佐として栄転されることになりました。課長補佐と申しますのは、早晚、課長の椅子が約束されているという位置でありまして、大達君には文字どおり栄えの御転任であります。由来、大阪と申しませば、われわれ商事会社にとりまして、商売のむずかしい、厄介なところとされ、それだけに才能ある手腕の発揮が必要とされているのでありますが、その大役を未だ二十……幾つでしたかね？ 大達君は。

或る声 二十一……。

或る声 十八……。（笑声）

或る声 四十六……。（笑声）

或る声 いろ男に年はなかりけり。（拍手）

（女たちも思わずくすくす笑う。そして目引き袖引きして菊子のほうを見る。菊子はそしらぬ顔でこの時、大きな枝を見事に止め切る）

課長の声 とにかくいまだ満三十歳には大分間のある……。

声々 (拍手かぶって) うまいぞ課長……。

課長の声 お若い大達君にゆだねられたということは、彼、大達君がいかにも前途有為な青年であるかという歴然とした証拠なのでございまして、かかる人材を出したということは東京本社総務部の誇りとも申さねばなりません。同君は、急に明後月曜日に出発されますが、現在なお独身、身軽であられるということ、同君の青春のため、また会社のためにも好都合でありました。(笑声) 何と申しまでもこのデフレの世の中、十分なこともできませんが、ビールは二本半ぐらいには当りますので、(笑声) ほろ酔い気分はまだ足りぬお方は、二次会三次会におねがいたします。(拍子) ではどうぞ、大達君。(拍子)

(女たちの中には思わず一緒に手をたたこうとするものがある。佐川、卓をたたいてたしなめる。女たち、顔を見合って失笑。大達の立った気配を感じている菊子と松子だけはこの時笑わず、固い沈黙)

大達の声 本日は、数ならぬ私のために、かかる盛大なお別れの会をお開き下さいましてありがとうございます。只今、課長さんから過分なお言葉を頂戴いたしました。が、栄転などとはとんでもないことで、こんな大役を命令した会社を、僕は実は恨んでるんです。

或る声 うそつけ!(笑声)

大達の声 いや、本当です。それに僕は東京が好きです。給料が少し増したからって、東京をはなれたくないのです。

或る声 泣いてわかれるひともある。(笑声)

(女たちささやきあって、菊子と松子は一そう固い沈黙。佐川はそわそわし出したB子に注

目)

大達 いや全くです。そやさかいとか、よう言わんとか、ああいうねちっこい言葉も私の性にあわんのです。しかし、社命とあれば止むを得ません。涙をふるって赴任致し、皆様の御期待にそえるかどうかかわりませんが、一生懸命やって来ます。今後ともよろしくおねがいます。ありがとうございます。

(拍手。男たちの私語。ビールの栓を抜く音。コップのかちあう音が騒然とおこる。同時に女たちの顔に一せいに解放感がよぎる)

佐川 (急にあわてたように) どうしたんでしよう。花屋さん。大達さんに花束をさしあげたいと思って頼んであったのに、まだなんですよ。(腕時計を見て) ちょっと私、電話かけてまいりますから静かにして下さいましな。(A子とC子に) よし子さん、てる子さん、もうお仕事しまっても結構よ。花をおとさないように。ゆき子さん……あなた一番新しいのによくそこまで……(ひとり笑って) あの……もうおきまりなんじゃない? 御縁談。急に御上達なすった……ね? お花は正直。人の心がそのままの姿に……。

B子 あの……花屋さんの電話……私いってまいります。

佐川 (とめない饒舌をたち切られて) ま……お逃げになるの? さては……ですか? (笑って) 私がまいます私が……いろいろの花でもまちがわれるとこれ……お祝いですものねえ……ではごめん下さい。(と、中年女の大げさな身振りと表情で左手に)

B子 (その姿にかぶせるように) いやあねえ……お花の先生……どうしてあんなことおっしゃるのかしら……だれか何か言ったのかしら……。

(しかし女たちはだれも返事しないで、急に花に気をつかいはじめる)

(隣室から男たちの一せいに笑う声がおこって止む)

松子 (その名にふさわしく体格のがっちりとした男まさりの感じ。佐川の出でいったのを待って、菊子に挑むような調子である) 菊子さん、あなた会社やめるんじゃない?

菊子 (色白の、やせてほっそりとしているが芯の強そうな) あら、どうして? (間髪を入れぬ返事は、かねての覚悟と用意された言葉だからだ)

松子 (うすわらい) どうしてって…… (衆をたのむ) ねえ……聞かなかった? あなたたち。菊子さんは大阪へ行く。

菊子 大阪へ?

松子 ええ……会社やめていっちゃうんだとばかり思ってたわ。

A子 私あたくしも。

B子 私……まさかと思ってた。

C子 あら、あなたから聞いたのよ私……菊子さんは大阪へ行く。

菊子 (だまってせっかく活けていた花をくずしはじめる)

A子 菊子さんの大阪ゆきとどう結びつくのか知らないけれど……とにかく大達さん……わが社のハンサムボーイがこれで一人減るのね。

松子 よし子さん……日本語で言っただい日本語で……大達さんがハンサムってどういう意味?

B子 ハンサム……そうね……ハンサムってのね……あのひと。

C子 そうかしら……総務課じゃ井上さんのほうがずっと魅力的じゃないかしら……私……大達さんのね……頭の匂いがきらいよ。

B子 あら、いつそんなにそばへよって見たのよ?

C子 このひと。一番べたべたよってるくせに……買ってあげなさい……たまにや購買部のはかり売りでないポマード。ね？ 近頃の男は、物をくれた女になびくんだった。

A子 大達さん……とても貯金してるらしいわ……パチンコだって麻雀だって、あのひとと並んだら絶対に勝ちっこないんですって……みんなひとりでかきあつめ。

C子 そうか……ゆき子さんって、そこに惹かれたってわけか。

松子 ゆき子さん……あなた何でもお金のあるひとが一番いい……会計さんに言ったんですってね……会計さんのところにあるお金はね……会社のお金よ。見っともない。

B子 わかっています……私、何も大達さんだけに惹かれたってわけじゃないわ……ひとそれぞれに長所がある……ひとは長所を見てつきあえていつか修養会であったじゃないの……話しが。

C子 聞いたけど……あなたのカメラは大達さんをうつすため、無理して月賦で買ったんだって。

B子 ひどいわ。私のうつしたのは大達さんばかりじゃないわ。景色だってほかのひとだって……花だって電車だってうつしたわ……あなただって何枚もとってあげたじゃない……私が大達さんの後姿とったの、みんなに内緒にしてくれるって言うから……だから私……女ってきらいっていうのよ……男のほうがよくぼどいい。帰るわ。(と、どんどん自分の花をはずしてつつんで、足音荒く出て行ってしまふ)

A子 ゆき子さんじゃないのかしら……大阪へ行きたいひと。

C子 大達さんはね……べたべたよってくるひと、いやらしくてぞっとするって。つんとして、わたしは何も存じませんってなひとを見ると、やっつけたくてぞくぞくする。

A子 あなたそうなりたいの？

C子 まさか……わたしあのひとに目をつけられるほど御美人じゃございませんから。

A子 でも、目をつけられたらうれいほうでしょ？

C子 うらまれます……めったに名乗りをあげると。

A子 そうよ、何も言わないのが一ばん利口よ……だからわたしだって何も言わない。

松子 大達さん大達さん……何だって夢中になるの？ みんな……あんなひとのどこがよくって。

A子 そう言や、男は何もあのひとだけじゃないのにねえ。

C子 そうよ。あげくの果てにはしよい投げ。きまっているんですってよ。

(女たち顔を見合わせてくすくす笑う)

菊子 (鋏を卓上に投げて) それ、私のことですか？

A子 あら菊子さん……何もあなたのことなんかじゃ……ねええ。(とC子に)

C子 もちろんよ。まあとてもいいお鋏……ずいぶんよく切れるでしょ？(と鋏を菊子の前にもってゆく)

松子 (きっぱりと) でも、うかがいたいわ……菊子さん……それがあなたのもりなら。

C子 松子さん……。

松子 いいえ、一度はつきり聞きたかったのよ……どうい御関係なのかしら……あなたとあのひと。大へ

んしよってらっしゃる……ね？ あのひとのまわりに、ほかの女がないみたいに。

A子 松子さん……およしなさいよ。

菊子 (うすわらいして) 私、大達さんに夢中になったわ。そしてしよい投げくわされたわ。それ何かお役

にたちますの？ みなさんの。

松子 ほかのみんなは知りません……私^{わたし}一生忘れない……去年の夏よ……夏休みのキャンプよ……会計の花

田さんとあなたが、私と三人で富士五湖へいくはずだった……あなた急にいかれない……ね？ 私たちの

計画おじゃんにさせて……大達さんと二人でこっそり芦の湖へゆき、一晚中ボート乗りまわしていた……聞いたわ……あとで大達さんに。大達さん得意になってしゃべってくれたの。

菊子 そう……そのとおりよ……月のいい晩だった。

松子 はずかしくない？ 友だちを裏切って。

菊子 友だちだなんて思ってません。

松子 友だちでなくてなあに？ 他人だっておっしゃんの他人だって……。

菊子 他人のほうがましだと思ってるわ。

松子 菊子さん！

(衝立のかけから社員甲がでてくる)

社員甲 おいおい静かにしてくれよ……静かに。え？ 何だい……きんきん言いあってんのは。(と、女たちを見る)

菊子 (甲を無視して) 友だちだなんて思ってない……友だちじゃなくて御親友だっておっしゃりたい？

お姉さんと妹……おみきどっくり。ずいぶん長い間のおつきあいでしたわ、あなたとは。でももうまっぴら。そりゃね……あなたは学校時代から崇拜してた上級生よ……ありがたく思ってます……この会社にもいれていたで……でも、だからってどうして私が大達さんに夢中になっちゃいけないんですの？ 松子さん……御存じでしょ？ あのひとが大阪へいくのはね……大阪の支店長のお嬢さんに見込まれたのよ……せいせいしてます……あなたをお姉さんなんて呼んでた日よりずっと今が幸福。それおわかりになるかしら……女にあまったれるより、男に捨てられるほうがましだってことなの。

松子 うそおっしゃい。毎日毎日ここんところ、お昼も食わずに屋上へいって身も世もあらぬお歎きじやな

い？ あっちの廊下のすみ、こっちの窓の下、何よ、いつも気のぬけた目をして、いつもみんなの前で大達さんはわたくしのものですって、大声あげてどなるんじゃないのかとひやひやしてるの。それ友情よ、女の。

(社員乙でてくる)

社員乙 うるさいねえ……帰れよ君たち、いいかげんに。

菊子 (乙を無視して) 松子さん……ひとのことよりあなたよ……たまにや映画に誘われてごらんさないな……男から、手をとられたり、肩を抱かれたり……女の扱い受けたことおあり？

松子 (はげしく甲や乙に) 男は来ないで下さい。(A子やC子に) あなたたち衝立のところに立っててちようだい。(甲や乙に) 向うへ行ってよ、男はじゃま。(甲や乙ひっこむ) 菊子さん……(と、やさしくでて) あなた、あのひとに捨てられて、それほど傷んでたのね？ 心。ごめんなさいね……まるでひとが変わったみたい。そうなの……もっと早くに気づくべきだったの……私が悪いの……組合の婦人部長として無責任だったの……あのひとの誘惑の手から、あなたを守らなくてはいけなかったのよ。

菊子 (声たてて笑う)

松子 菊子さん……もっと聞かせて……あのひとのこと。それ決してあなただけじゃない、みんなの問題……ね……婦人部のみんなの。

菊子 松子さん！ よして……私……組合なんて大きらい……衆をたのんで何ができたの？ みんなって何なの？ ずらりと並んで男がえらぶ順番待ってる……心はてんでんばらばらってこと？ 私きらい……えらそうな、きれいそうな言葉、みんなむだ。だれかの幸福が、だれかの不幸にきまつているのに、口を揃えてみんな……みんな……うそっぱちよ……新しがりたいための団結。私そんなひま勿体ないわ……自分

のためによ。

松子 そうよ……あなたはそれで自分だけ男が欲しいような顔して、いつも不潔な目つきで用もないのに、会社の中じゆういったり来たり……ね？ 机の前では、帳簿見るより鏡を見てたの。

菊子 そうよ不潔よ……みんなのためだと二言目には口に出し出し……一人の男のデスクにこっそり花をさしてる……毛糸のネクタイそつとあんで贈ってもいる……それが不潔でないというなら。

松子 だれのこと？ それ。

菊子 男ぎらいは表看板。せいぜい髪から姿かたちから男のまねばかりしてるってのは何なの？ どんな男も眼中にない……じつはたった一人の男で、いっぱい。

松子 菊子さん！

菊子 あなたのことだとおは申してません。

(社員丙でてくる)

社員丙 (少し赤くなつていて足もよろめいている) 何をうだうだ言うてんねん……え？ 女三人よれば姦びすしいにおまけが一人か……(C子に) おい……君ちよつと来てお酌してくれよ……女気がのうてはビール

ールの味も番茶の味のわびしさよ……てなもんやないかないか道頓堀……よだ。

C子 (花をあわててしまつて) 帰ります……私。(と、どんどん出てゆく)

社員丙 (笑つてA子に) あほくさ……ねえ！ ビールだと思わなきゃいいじゃねえか……お茶だと思えば……お茶くみは女の子の得意じゃねえか……その融通の原理をだね……君。

A子 (花をあわててしまつて) 帰りますわ。(と、どんどん出てゆく)

社員丙 (笑つて) 去るものは追わず……真打はおあとに控えております。(と、わざと松子のそばを遠ま

わりして菊子のところにゆく。ていねいにおじぎ。松子つんとしている。ねえ……菊子さん……営業部のスター……わが総務部は代表として君の参加を要請するよ……ね……ね……ちよつと来て下さい。

菊子 (つめたく) 何でしょうか？

社員丙 おツ……つめたいことを言いますな……あんたのおとしたハンケチ……目を皿のようにして待つてらるってのがうようよいるんだぜ……衝立の向うにや。

菊子 あちらへいらして下さい。

松子 菊子さん……いらっしやいな……さつきからいきたかつたんでしょ？

社員丙 そうだ。わかる……彼女は大きいにわかる……向うに待つてるひとがいる……さ……汽車の時間があるんだってよ……汽車は出てゆく煙りは残る……。(と手をとろうとする)

菊子 よして下さい。そんなの社員の服務規定にございまして？

社員丙 ははア……ございまして？ 大きくてましたね？ 大きく。なあんでえ……自分がどれほどの美人と思つてんのかね……他に女らしいものが見えねえから声をかけたまで……ふん……お高く止まりやがって……大達に捨てられるのも無理はねえや。(松子に) どうも失礼致しました。婦人部長さん……あとで問題にしないでね。(と、すてぜりふあつて中に入る)

(拍手)

課長の声 では、大達君をおくるにさいしまして……謡曲松風の一節を独吟いたします。御承知のようにこれは中納言在原の行平が須磨の浦の乙女松風・村雨のきょうだいを愛して、都に去つたのち、二人の乙女の亡霊が彼のおもかげを恋い慕うという甚だ大達君にふさわしい一曲であります。(拍手と笑声)

大達の声 いや、僕はそんな殺生なまねした覚えは毛頭ありません。まさにえん罪であります。(拍手と笑)

声)

或る声 本音を吐け！ 本音を！（拍手と笑声）

課長の声 （せきばらい一つ）あわれいにしえを思いつればなつかしや、行平の中納言、三年はここに須磨の浦、都へ上がりたまいしが、このほど形見とて、御立烏帽子狩衣を、残しおきたまえども、これを見るたびにいやましの思い草、葉末に結ぶ露の間も、忘らればこそあじきなや。形見こそ、今はあだなれ、これなくば、忘るるひまもありなんと、よみしも理や、なお思いこそ深けれ。——どうも調子が出んですな。このへんであとに思いをのこしますか。な、大達君。

（拍手と笑声）

（この間、舞台では、松子と菊子も黙々として花を活け、鉢をつかっている）

菊子 松子さん……いきましようか二人で……芦の湖でも富士五湖でも。友だち同志とは言わないわ……ゆきずりの二人。ね？ 山は寒いか……地面が凍って。ゆれてる水見ると死にたくなるか……ねえ……おぼえてらっしゃるでしょ？ 十年昔よ……若かった日……戦争さなかの勤労働員で志村の工場にいった時……先生の目をぬすんじや荒川の土手にいって、水の流れを見てたじゃない。水は生きてる……わたしたちは死んでる……ねえ……肩をよせあって泣いたじゃない。こんなみじめさに生きてるよりはいつそ死にたい……毎日のように警報つづきで息つく間もなく脅かされて……だれのいのちなのかと憤^{いきど}おろしかったわ……せめて自分のいのちを自分で亡ぼす誇りにあこがれたわ……あなた「平家物語」の安徳天皇のくだりを暗誦してた……この国は粟散辺土と申して、ものうき境にて候。あの波の下にこそ、極楽浄土とてめでたき都の候。それへ具し参らせ候うぞ……ね？ あの頃はよかったと思わない？ あなたとわたしとちやんと言葉が通じたの……同じ言葉だったの……死ぬこと生きること……二つきりなかったせいかしら。

あなたの言葉はわたしの言葉……あなた好きだったわ……世界中でだれよりも。

松子 (うすわらいして) へえ……いつおぼえたの？ 浪花節じゃないのそれ。

菊子 学校を卒業して……何人あったかしら男に……欲しいと思えば探さなくてもいくらでもいたわ……なのに、あなたをおいて結婚しようとは思わなかった。それ信じて。あなた女じゃいられなかった。男の方たち戦死して、お家が焼けて、その上たった一人のお母さんが病氣……あなた小さいひとたち一人ずつ育てあげてた……尊敬してたわ……えらいひと。立派なひと。松子さん……それほんとに信じて。自分の幸福よりあなたの幸福。ねえ……結婚だけが女の生きるよろこびじゃない……そう言って、あなたに誓ってたじゃないの……何年も前から……同じ会社にもつとめたじゃないの。

松子 見ちゃいられなかったわね……私は女が好きでございます……実は男が目についてならない……恩に着せないでよ。あなたお妾の子だから、縁談だつてろくなのないうつてこぼしてたでしょ？

菊子 だれだつて、はつきりおっしゃいよ……あなたがそんなに変えてしまったひと。そりゃあね……わたしはもともと男がきらいよ。日かげの身の母を見てればつくづくと思つたわ。可哀そうなお母さん。ずるい男の玩具になつて。何べん母に言つたか知れない。どんな貧乏してもいいから、あんなお父さんとわかれてちょうだい。母わかれなのよ、今もよ。わたしに言うのよ。お金がもらえて、大事にされて、何をいきまわることがあるの。わたしそんな母もにくんでるわ。

松子 そうよ、結構な御身分よ。あなたわたしみたいに貧乏してごらんさいな。年中お金の心配ばかりさせられて……せめてたつた一月、たつた十日、たつた一日でいいから、何も考えないでいろつて、だれかに言われなくなるわ。

菊子 どうして女からそう言われたくないのよ……わたし尊敬してたのあなた。白紛一つ紅一つ、髪さえパ

ーマネントもかけなかった……いつも弟さんの手袋あんだり服をぬったり……。

松子 泣きの涙でね……ひとには見せない。

菊子 まさか、あの男にお金借りたなんて言うんじゃないでしょうね……お金なら会計の花田さん……あのひとこそ貯金しててみんなに貸すんですって。わたしあなたとあのひとの組み合わせいいと思ったの。四十近くになっても一人でいて、お金をせつせとふやしてるってひと。気が小さくて女がこわいんですって。ね？ 年も頃合よ……もうすぐ三十ですもの私たち……なのにあなたって、よりによってあんな移り気なあんな軽薄な……あんな男に夢中になって……ね？ しい投げくわされたでしょ？ 私、あなたからとろうと思ったんですもの。あなたの傷の深くならないうちに。

松子 身を犠牲にしてと言いたいんでしょう？ 私、悔んだわ……あなたとあのひとと芦の湖へいったと聞いた時……なぜ早くわかって、二人並んでる前で死んでやれなかったかしら……あなたをとられた恨みなのよ男に。

菊子 芦の湖へいきました……湖のまん中で聞いたわ……あなたとあのひととどうい御関係？ どういふうにしてあのひとをつきおとしてやろうかと、そればかりねらって一晩あけたの。あなたをとられた恨みよ男に。

松子 何という、ものも言いよう……。（声たてて笑う）

菊子 （近よってその肩に手をのせる）ね……言ってちょうだい……大達なんてあんな男……つゆほども思っていないって……あなたに将来を誓いながら大阪へいく男。

松子 （顔から手をひらいて菊子の手をはずし）自分のせりふを他人に言わせてそれで思いをほらしたい？
菊子 だれが？

松子 あなたが。

菊子 松子さん……どうして本当のことおっしやらないのよ……何がはずかしいのよ……自分が女だってことが、そんなに口惜しい？ 私をごらんさないよ……だれの前でも平気よ……あの男を愛したと言ってよ……愛した愛したとふりまくたびにあのひとに惹かれた心が一枚一枚はがれてゆく……いばった口は聞きません……あなたのそばからあの男をとるには……自分があの男のものにならなければならなかった……そのこと後悔してないわ。

松子 (声たてて笑う、ヒステリカルに)

菊子 松子さん、それでもあなたはもったいぶりたい？自分は女じゃないって？ 私知ってるの……あなたの言葉。あなたがあのひとに言った言葉。

松子 それをわたしに言わせてどうしたいのよ？

菊子 (暗誦するように) あなたの目が好き、口が好き……あなたの髪の毛の匂いかいだと、からだじゅうがしびれるの……(急に鋭く) これは何？

松子 (とっさに鋏をにぎりしめる)

菊子 (なお暗誦をつづけて) わたしを捨てないでちょうだい……わたしを捨てないでちょうだい……わたしを……わたしを捨てないで。

(その時、衝立のかけから課長と大達がくる)

課長 (大達に) もういいですよ君……座が白けるから……どうぞどうぞ……(松子と菊子に) やあ、まだやってんの君たち。熱心だねえ……君たちみたいな女房もらったら男も仕合わせだねえ……あ……すんだら向こうへ一緒になりたまえな。え？

(と言いいい、二人が固い会釈をするかたわらをすつと出てゆく。大達は扉のところでおじぎする)

(衝立の向こうではさわぎが大きくなる)

(「てなもんやないかないか道頓堀」とか、「お富さん」とかの歌。「おい、ビールはこれだしまいか」などという声もある。しかし白昼なのであまり氣勢は上がらない)

大達 (さり気なくもどつて来て凝然と見つめる松子と菊子に) 来ない? 君たちも向こうに。

(女たちは無言である。大達はもとにもどつていこうとする)

松子 大達さん。

大達 (ふりかえる)

松子 (つくられた微笑で) 改めて御挨拶に上がらなくちゃならないんですけれど……本当にいろいろ御親切にしてください……。弟の月謝もお借りしたまんまでですけど、いずれ大阪のほうへお送りいたします。

大達 いや、いいですよ……どうでもそんなもの……固いですね……いやに今日は。

松子 いえ、お返ししなければなりませんわ……あなたとわたくしの間を必要以上にうたがう方がありませんもの。

大達 うたがわれても処置ないな……ね? あれはね……僕とあなたの友情のしるしとして、永遠にあなたのところへ据置ききつてことにおいでいただきたくいです。菊子さん……あなたのことも僕は忘れられないな……大阪へいっても、ときどき帰って来ますからね……。

菊子 その時私が貸してあげたお金は返して下さいね……松子さんにあなたが貸した分も。

大達 ああ、つとめてそうしましょう……あなたも固いからな……勘定は勘定……はっきりしてた……いや、そのほうがかえって合理的かも知れん……よくわかりました。あなた方二人は全ききようだみたいだ……僕が死んだら一緒に墓まいりに来て下さい。僕のほうがあとに残るかもしれないが。（と、菊子に近づいて肩に手をかけ）どうして、そんな悲しそうな目をしているの？僕はあなたが笑った時の目じりのしわが何とも好ましいんだ。（と、今度は松子のほうに近づいて行って、また肩に手をかけ）あ……君は香水をつけてる……花の匂いかな？ 関西へいったら君に京紅をおくりますよ……君の唇は紅をぬると見違えるようにきれいになる……菊子さんにもわけてあげてね。（と言って、ひとりいい気持ちでいよいよ騒ぎの大きくなった衝立の向うへ入っていかうとする）

松子 （やにわに鉄をもって、その後を追う。その背につきたてようとしたとき、菊子の声がかかる）

菊子 待って！ その服に傷をつけないで。私を買ってあげたんだから。

松子 （そこに突っ立つ）

大達 （その声に気づいたようにふりかえって、にこりとして）この服？ 服がどうしたの？ そう……このネクタイも菊子さんに買ってもらったっけね。うれしかった。ふふふ……。 （と言い捨てて衝立の向うに入ってゆく。拍手おこる）

松子 （その音の中で室の隅の花をおいてある卓にくずれるように身を伏せて忍び泣く）

菊子 （しずかにその後近づいて、肩を抱くようにして）松子さん泣かないで……笑ってちょうだい。花が生き生きするにやね……水を吸いあげる切口も鮮やかでなくちゃならないのよ……水は涙と限らない……私たち……あの男にけがされてやっと同じ言葉がもてたと思わない？ 一緒にやっとなつたという……ねえ、男はしんじつ女の敵なのだという……そのこと胸にたたみこまないで、何の仕事ができるとい

うの？ 女のひとのみんなのためだなんて……そんな言葉軽々しくはいえない……それがわかったところから事は始められなくちゃならないと思うの。

松子 (菊子のかたわらから、つと立って) わたしあのひとをにくめないわ……敵とも思えない……あのひとと忘れられない……どんなにふまれてもけられても……あのひとが……あんなぼろぎれみたいの不潔な男が……からだのすみずみにまでしみこんでるわ。

菊子 それ自分ばかりだと思ってる？

(松子にむかって立つ)

菊子 あのひとをにくむと言って。捨てられて惜しくないと言って。あのひとのいくところいくところ、女のろいが満ち満ちるように祈ると言って。ね、言って。あのひとをにくむと。

松子 (菊子の視線を受けとめて) それよりわたしに死ねと言ってよ。

菊子 どうして死ぬことがあるの？ 今こそ生きるんじゃない。やっと生きるめあてができたじゃない。にくむために。にくむために。(松子をぐいぐいと窓のところにおしてゆく)

(佐川が腕一ぱいに花をかかえて入ってくる。松子と菊子は背をむけて窓の外を見ている)

佐川 ああ、いい匂い……本当に花はこの世で神様のおつくりになった一ばん美しい自然ですわね……このいろ……このかたち……ふくいくとしてゆたか……大達さん……大阪へいらっしゃる汽車ん中まで、ずっと持っていただけのように一番しっかりした花を選んだんです……あの方本当に御親切……私のお弟子の少いのを心配してくれましてね……こちらにこうして土曜日ごとのおけいこの時間つくって下さったのよ……私の恩人……私……あのひと自分の息子みたいな気がします……(笑って) 愛人みたいって言うてもいいかしら……もうようござんすわね……大阪へいっておしまいなるんだから……。(と、二

人のほうには心もそらで、一人うきうきしゃべりながら衝立の向こうへ入ってゆく。松子と菊子ゆっくりと佐川のほうにむきなおる)

早い幕

底本.. 『田中澄江戯曲全集 第二巻』

白水社

1959年10月15日印刷

1959年10月20日初版

入力..平 佐喜子

2024年1月7日作成